

祭りを通じた地域社会の担い手づくりの可能性

— 新潟県十日町市鉢集落を事例として —

清水 健 太

早稲田大学大学院社会科学研究所

アブストラクト：本稿では新潟県十日町市鉢集落を事例として、そこで開催される様々な祭りにおける共同作業の特徴と、そのような特徴をもつ共同作業を通じて人々が地域で何をどのように担える主体へ形成されていくのかを考察した。鉢集落の祭りにおける共同作業には、様々な試行錯誤を伴いつつ自律的に遂行されるという特徴がある。そのような特徴は作業を非効率的なものにする一方で、様々な工夫をして共同作業の質を高め祭りをよりよく開催することを可能にしている。自律的な共同作業の遂行は、共同作業が様々な試行錯誤を伴うことも含む形で慣習化しているために可能になっている。慣習化は個々の祭りに対してはもちろん様々な祭りに通底する「多数の人が満足できる場を設け運営する」共同作業一般に対しても生じている。祭りに関わる人々が共同作業の経験を通じて共有する自律性は、メンバーや用いる資材、行う事柄や進め方の共通性が一定程度担保されるならば、災害時のような経験のない状況でも「多数の人が満足できる場を設け運営する」共同作業を行えるようなものだと考えられる。

Possibility of Creating Community Leaders through Local Festivals: A Case Study of Hachi Village, Tokamachi City, Niigata Prefecture

Kenta SHIMIZU

School of Social Sciences, Waseda University

Abstract: In this paper, I examine the features of communal work in the various community festivals held in Hachi Village in Tokamachi City, Niigata Prefecture and how such communal work shapes people into community leaders. Communal work in the community festivals in Hachi is characterized by autonomous execution with much trial and error. While having such a character makes the work inefficient, it also enables us to improve the quality of the collective work and organize the festival more effectively. The autonomous performance of communal work is made possible by the fact that this work has become customary in a way that includes various trial and error processes. Conventionalization occurs not only for individual festivals but also for communal work that involves “setting up and running a place that satisfies many people.” The autonomy that people share through communal work in festivals is thought to be such that if a certain degree of commonality in the members, materials used, and tasks and processes is ensured, it enables them to set up and run places that address the community’s needs even in situations they have never experienced before, such as when a disaster occurs.

1 研究の背景と目的

過疎化や高齢化が進む中山間地域で地域社会の維持が困難になっているという認識が一般化して久しい。大野晃（2005）が山村について「限界集落」という言葉でこの状況を指摘してからも約30年が経った⁽¹⁾。だが農山村集落は「厳しい現実の中で『どこい生きている』」（小田切 2014：43）と言われる。「限界集落」化が進みながらもなお地域社会が維持されているとすれば、その背景には厳しい状況においてもなお地域社会を維持しようとする人々による主体的な取り組みがあると考えられる。取り組みの内容は地域により様々であろうが、地域社会の維持と深く関係するものとして祭りが挙げられる。

祭りと地域社会の関係を考える際にまず想起されるのは、祭りが社会を統合する機能を有するという点である。例えば上野千鶴子（1984）や芦田徹郎（2001）はそれぞれ祭りの定義的な説明を行っているが、両者ともに社会学者E・デュルケームの論に主に依拠して、祭りが日常的には対立関係にある個々人を集団へと一体化する非日常的な営為である点に言及している。しかし芦田は、祭りが地域社会を統合する機能を果たすことは現代では困難だと指摘している。芦田は地域社会の解体や祭りの日常化⁽²⁾が進行する状況に鑑みて、現代の祭りは「地域社会の再生、アイデンティティの確認、人間性の回復といった期待」（芦田 2001：47-48）には応えがたいという見方を示す。共同性や非日常性を志向し隆盛する現代の祭りは「幻想でしかない共同体への人びとの郷愁と憧憬の表明と考えるのが、むしろ現実的」（同：48）であり、祭りで成立しうるのは「せいぜいが次の瞬間には雲散霧消する『一瞬の共同体』」（同）だと厳しい。確かに、現代社会では人々の生活はますます個別にかつ広域的に充足されるようになっており（松岡 2007：64-70）、地域社会の重要性は他の様々な社会関係によって相対化されている。たとえ集落のような小規模な地域社会の祭りであっても、全てないし多数の住民の参加を実現することは決して容易ではないだろう。実際に澁谷美紀（2000）は岩手県の農村集落における伝統行事の事例について、住民参加の減少により地域社会統合機能を失い、もはや集落が社会的まとまりの単位であることを象徴的に認知させる意義があるに過ぎないと評価している。もちろん、井上果子（2019）が地域全体の参加で運営されている伝統神楽の事例を報告しているように、祭りによる地域社会の統合は困難だとしても不可能ではないだろう。祭りを地域の文化的基盤や

(1) 山下祐介（2012）によれば、大野が限界集落という概念を初めて提起したのは1988年だという（山下 2012：27）。ただし、大野（2005）に収録されている論文のうち初出が最も早い「現代山村の高齢化と限界集落」（原題は「山村の高齢化と限界集落」）は『経済』1991年7月号（新日本出版社）に掲載されたものである（大野 2005：298）。

(2) 芦田は、祭りが日常生活の祭りへの接近および日常的秩序による祭りの制約という二重の意味で日常化していると指摘している（芦田 2001：48）。日常性と非日常性は相互補完的・相互依存的な関係にある（山田 2010：89）。それゆえ祭りの日常化が進む現代社会では、祭りにおける非日常性の強度や魅力が相対的に低下することは避けられない。

共同体維持の観点から重要視し、その継続の方法について考察する研究は近年でも行われている⁽³⁾。

だがその一方で都市・農村計画分野の既往研究の中には、現代もなお開催される祭りが地域社会を賦活する事例を、社会の統合とは異なる観点から分析するものもある。根岸亮太ら（2007）は伝統的な祭事の事例研究から、催事運営への参加が町外者にとって他の祭りや地域行事にも関与する契機になっていることや、地域の若手を育成し地域運営全体への自立した参加へ至る機会になっていることを指摘している。塚佳織ら（2010）は陸前高田市気仙町今泉で開催される祭礼の事例を外部主体との協働に着目して分析し、外部主体とのブリッジング型ソーシャル・キャピタル（SC）の形成が地域コミュニティ内部におけるボンディング型SCの強化に有効に作用して、コミュニティの脆弱化が回避されていると指摘している。そして外部主体とのブリッジング型SC形成において重要なポイントとして、外部主体と協働する意義に対する理解が共有されていることと、直截的な意思疎通を伴う共同作業を充実させることの2点を挙げている。篠永信一郎ら（2020）は祭りに対する関与度と地域コミュニティに関する意識との相関関係を明らかにし、祭礼活動にSCや地域愛着を高める地域住民活動という側面があることを指摘している。以上の研究はいずれも、祭りに実際に関与する人々やその人々が祭りを実現するために行う共同作業に焦点を当てている。そして祭りを実現するための共同作業への関与を通じて人々が地域社会の担い手へと、つまり地域において祭りに限られない様々な事柄を成し遂げられる主体へ形成されていく可能性を示唆している。例えば篠永ら（2020）は祭礼活動が「生活防災」⁽⁴⁾として機能し、防災や減災に関する共同作業をよりよく行えるようになる可能性に言及している。本稿ではこの、祭りを通じた地域社会の担い手づくりの可能性に着目する。

地域社会の担い手づくりとしての祭りは、当該地域社会の人々にとって、たとえ全員参加がかなわなくてもも有意義な地域づくりの実践となりうる。そしてそのためには、ただ祭りをするのではなく、どのように祭りを行うかが重要になる。この点に関して、根岸ら（2007）は祭事の運営体制の年功序列的な階層構造が若手の育成に寄与すると指摘し、塚ら（2010）は協働作業を通じた交流が高い頻度や密度であることの重要性を明らかにしている。しかしながらこれらの研究では、共同作業の具体的な内容や進め方についてはほとんど言及されていない。祭りを通じた地域社会の担い手づくりを構想・実践しようとする際には、事例の結果はもちろん、そのプロセスへの理解が有意義な知見になる

(3) 例えば卯田卓矢ら（2015）は、過疎地域における祭礼存続に自治体が果たす役割について、担い手の確保という観点から考察している。井上果子（2017）は井上（2019）と同一の伝統的な神楽の事例研究から、子どもの育成機能や他出者等の受け入れ機能といった新しい意義への注目が伝統文化継承に重要だと指摘している。また井上（2019）でも、神楽奉納を含む伝統的な祭りの持続は、祭りの継続を重要だとする価値観を共有し続けられる程度によるという指摘がなされている。

(4) 矢守克也（2011）は「生活総体（まるごとの生活）に根ざした防災・減災実践」（矢守 2011：1）を生活防災と呼ぶ。防災・減災を個人の日常や地域社会の活動に組み込み、生活文化として定着させようとする考え方である。生活防災の視点に立てば、例えば近隣住民と挨拶をすることは、空き巣・不審者対策や災害時の共助の基盤になるという点で生活防災の具体的な実践例ということになる。

と考えられる⁽⁵⁾。それゆえ本稿では、祭りにおける共同作業のあり方と、その共同作業を通じて成し遂げられるようになることとの関係を具体的に理解することを試みる。祭りを中心とした地域づくりに40年以上取り組んでいる新潟県十日町市鉢集落を事例に、祭りを実現するための共同作業のあり方を分析し、その共同作業を通じて人々が地域において何をどのように担うことのできる主体へと形成されていくのかを明らかにする。それによって、祭りを通じた地域社会の担い手づくりを構想・実践する際に有意義な知見を得ることを目的とする。

2 研究の方法

(1) 対象事例の概要

1) 鉢集落

新潟県十日町市鉢集落は、十日町市の市街地⁽⁶⁾から9キロほど離れた山あいにある。全国有数の豪雪地帯に位置し、冬期の積雪深は3メートルを超すこともある⁽⁷⁾。1960年代以降人口減少が続いており、1960年には131世帯678人だったが、1975年には108世帯453人、2021年12月末時点では50世帯117人となっている⁽⁸⁾。高齢化も進んでおり、同じ2021年12月末時点の高齢化率は56.4%である⁽⁹⁾。

2) 住民組織「真生会」

鉢集落では「真生会」という住民組織が様々な祭りを主催している。真生会は、1977年に当時30、40代の男性住民有志が集まって結成された。「鉢という部落に住む人々が、生きがいをもち活気のある地域

(5) この点については平井太郎（2019）の議論が示唆的である。平井は、地域づくりの事例紹介では「何 what がなされたのか」という結果が目立ち、「どう how なされたのか」という過程への言及が希薄になりがちであると指摘している。だが、地域づくりの方法としてのワークショップを実際に進める上では、ワークショップをすることそれ自体以上にどう行うかが重要になる。平井はそのようなプロセス重視の立場から、自身が関与する住民ワークショップの事例について、地域住民の変化の過程を具体的に論じている。平井が扱うのは外部者の関与する住民ワークショップの事例であり、本稿で論じる住民の手による祭りとは異なる点が多い。だが過程の分析が地域づくりに対して実践的な知見を提供するという示唆は、祭りの事例研究にも有効だと考えられる。

(6) 北越急行十日町駅を基準にした。

(7) 鉢集落には雪の観測所（真田補助観測所）がある。ここでの記録によれば、2009－2010年から2018－2019年までの10年間の冬では最大積雪深は平均295cm、長期積雪は平均130.6日である。元データは十日町市ホームページ「過去の雪記録」〈http://www.city.tokamachi.lg.jp/kurashi_tetuduki/A044/A046/1545196578873.html〉より取得し（2020年10月30日アクセス）、筆者が各数字を算出した。なお真田補助観測所は2019－2020年以降、観測の担い手が不在になったため欠測となっている。

(8) 人口は新潟県十日町市教育委員会・立教大学学校・社会教育講座編1979『十日町市における文化財の調査5 昭和52年度』および十日町市ホームページ「住民基本台帳人口」〈<https://www.city.tokamachi.lg.jp/soshiki/somubu/somuka/1/gyomu/1450419702866.html>〉（2022年1月10日アクセス）より入手した住民基本台帳のデータによる。

(9) 高齢化率（65歳以上人口が占める割合）は、十日町市役所より提供していただいた住民基本台帳のデータをもとに筆者が算出した。

にしようと、中年の働き盛りの人達が中心となって創立された会、それが真生会」(真生会 1992: 3) だといひ、結成以来40年以上にわたり活動が続いている。2020年11月時点では20代後半から60代前半までの男性有志19名が参加している。この19名の現役会員と、現役会員の上限年齢の65歳を超えたOB会員18名を合わせた37名が真生会の総員である。有志参加の組織であるため、鉢集落の人々⁽¹⁰⁾の中には真生会に参加可能な年代だが参加していない人や、会員だが活動への参加頻度が低い人も一定数存在する。

真生会の主な活動は集落行事の企画運営である(表1)。その中でも9月の石仏まつりと2月の雪まつりは大規模な行事であり、多数の人が参加する非日常的な交歓の機会になっている。また8月の盆踊りと1月の道楽神も、比較的小規模ではあるものの非日常的な交歓の機会としては石仏まつりや雪まつりと同じく「祭り」だと捉えることができる。真生会は、祭りを主な方法として地域づくりを

表1 真生会が行う主な活動

開催月	行事・活動	行事と活動の概要
4月	親桜会	真生会主催で、集落内の集会施設「ふるさと会館」で酒宴が設けられる。参加者は集落住民および鉢集落と縁のある人々(絵本と木の実の美術館関係者、旧真田小学校関係者など)である。
8月	盆踊り	絵本と木の実の美術館と主催し、「BACCA*GOHGIな鉢祭り」として実施。2013年よりこの形態で、主な催しは音楽ライブである。真生会は美術館の駐車場に櫓を組んだり、屋台を出して焼きそばや飲料を販売したりする。
9月	石仏まつり	真生会主催で9月第一週の週末に開催される。初開催は真生会結成翌年の1978年である。土曜は「鉢の石仏」(本文第6節を参照)においてステージ・ショーが催され、真生会が手づくりする夜店では飲食物や玩具の販売、射的や金魚すくいなどが行われる。翌日曜には集落を一周する神輿が出されていたが、担ぎ手不足により2016年を最後に取りやめとなった。
11月	十二社祭	一年の収穫に感謝する、神社の祭礼である。鉢区主催で行われ、真生会は神社の鳥居に灯籠を吊るしたり、幟を立てたりといった飾りつけ作業を担当する。
12月	X'masプレゼント配り	真生会主催で、集落の中学生以下の子どもたちに真生会員がプレゼントを配って回る行事である。
//	べ縄づくり/初詣飾り	X'masプレゼント配りと同日に初詣飾り用のべ縄を制作する。そして12月30日にべ縄等で神社を飾りつける。大晦日の午後に道つけ(神社への参道に積もった雪をかんじきで踏みしめる作業)、深夜にろうそくおよび電灯の点灯を行う。
1月	道楽神	いわゆる小正月の火祭りであり、鉢集落では道楽神と呼ばれる。1978年に復活させられた。真生会主催で、小正月に近い日曜に行われる。竹やワラ、正月飾りなどを円筒形に組み上げた「道楽神」を当日の午前に製作し、午後に点火する。道楽神が燃えた後の残り火でスルメを炙って食べる。最後に歳男・歳女による福まきが行われる。
2月	雪まつり	(本文で詳述)

フィールドでの調査をもとに筆者作成

(10) 真生会の会員は現在もお鉢集落に居住する人々が大半を占めており、その点で真生会は「住民組織」と呼ぶものである。だが真生会の会員には、2021年現在、仕事等の理由で鉢集落の外に居住しながら真生会の活動に参加している人も数名いる。また真生会が主催する様々な祭りでは、他出者やその家族が祭りに参加し楽しむ姿もしばしば見られる。すなわち真生会と鉢集落に居住していることとの関係は、現在もお本質的ではあっても絶対的ではないのが実態である。それゆえ真生会を、鉢集落に現在居住している人々はもちろん他出者やその家族のことなども程度さはあれ含む「鉢集落の人々」の有志が、その「鉢集落の人々」自身のためになる活動を行う組織だと理解する方が、実態にも真生会の人々の認識にも即していると考えられる。「鉢集落の人々」に近い意味で、当地では「鉢んしょ」という言葉が用いられる場合がある。「しょ」とは「人々」の意味である。「鉢んしょ」は「鉢集落の住民」のように明確な定義を含意しない、曖昧さのある言葉である。だがその曖昧さゆえに、一定の有限な広がりでありながらその外縁を一意に画定し難い地域社会の実態に即した言葉になっているのだと考えられる。本稿では以上のような理解から、「鉢集落の人々」を「鉢集落の住民」と異なる、意味範囲がより広くて緩やかな語句として用いている。

行う住民組織である⁽¹¹⁾。

3) 雪まつり

本稿では真生会が主催する様々な祭りの中でも、最も規模が大きい「雪まつり」を主な考察対象として取り上げる。雪まつりは、真生会が主催し、鉢集落の自治組織である鉢区⁽¹²⁾や、老人会・婦人会・若妻会などの団体⁽¹³⁾が協力する形で実施される。十日町市では、毎年2月に十日町市一円で「十日町雪まつり」(主催・十日町雪まつり実行委員会)が開催される。鉢集落の雪まつりは、この十日町雪まつりに参加する形で行われる。鉢集落の雪まつりは1981年に初開催され、以降2019年まで毎年開催されていた。だが2020年は少雪のため、2021年は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で中止となっている⁽¹⁴⁾。

雪まつりは、鉢集落の集会施設「ふるさと会館」の周辺で開催される。中心的な催しは、雪や単管パイプなどで製作される「ほんやら洞」という巨大なかまくらの中で開かれる「ほんやら洞酒場」である(図1)。「ほんやら洞酒場」の他にも餅つき大会や音楽ライブなど、1日で様々な催しが行われる(表2)。以上の催しの他にも、十日町雪まつりの企画の一つ「雪の芸術展」に参加する形で雪像を制作していた。1981年の初開催から毎年制作され、2004年ごろからは「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ⁽¹⁵⁾」をきっかけに集落と親交を深めた芸術家らとともに雪像制作を行っていた。だが雪像制作は人手不足等を理由に2019年に中止となった。



図1 ほんやら洞酒場(2019年2月16日、筆者撮影)

(11) 集落行事の企画運営以外にも、祭礼時の神社の飾りつけや、祭りで上がった収益を元手にして地域の公共施設に物品などを寄付する活動を継続的にやっている。

(12) 他地域での自治会や町内会に相当する。原則として集落到住する全世帯が加入し、各世帯が人手と資金(賦課金)を出して運営される。運営は区長をはじめ10人の委員が主に担う。

(13) いずれも特定の性別や年齢に該当する住民が原則全員参加する団体である。

(14) 新型コロナウイルスの感染拡大の影響は、真生会が主催する他の行事にもおよんでいる。盆踊りは2020年と2021年ともに中止となった。石仏まつりは、2020年と2021年どちらもステージ・ショーや夜店などの主要な催しが中止となり、鉢の石仏の入り口に幟旗を掲揚することのみ行われた。一方道楽神は2021年1月もマスク着用のもとおおそ通常通り開催されている。

(15) 十日町市および津南町の2市町からなるエリアで3年に1度開催されている国際芸術祭である。2000年に第1回が開催され、2018年には第7回が開催されている。鉢集落は2000年の第一回から継続して参加している。2009年には、集落内に立地し2005年に閉校となった旧十日町市立真田小学校の校舎を利用した作品「鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館」が開館し、2021年現在も冬季を除き営業を続けている。

表2 雪まつりの催し物

催し物	内容	開催時間
ほんやら洞酒場	ほんやら洞内で催される仮設の飲食店である。商品は焼き鳥（¥100/本）、豚汁（¥100/杯）、おでん（¥250/杯）、うどん（¥300/杯）、肉まん・あんまん（¥60/個）、缶ビール（¥250/本）、缶ジュース（¥100/本）、日本酒熱燗（¥100/杯）、カジカ酒（¥500/杯）、鮎の塩焼き（¥500/匹）、甘酒（無料）である。竹細工の技術をもつ住民が手作りするザルやカゴなどの民芸品の販売も行われる。	10:00-21:30 (2019年は 20:00まで)
お楽しみ芸能ショー	2018年と2019年はいずれも、十日町市などで活動するフォークデュオによる音楽ライブがほんやら洞内で行われた。	11:00-
餅つき大会	木製の杵と臼を用いて餅をつく。例年ふるさと会館の駐車場で開催されるが、2018年と2019年はいずれも悪天候のためほんやら洞内で行われた。つき上がった餅は客にふるまわれる。	12:00-
ちびっ子宝さがし	雪に埋めた菓子などを探す子ども向けの催しである。2018年は雪像周辺で、2019年は雪上カーニバルショーのためのステージ上で行われた。	14:00-
雪上カーニバルショー	ふるさと会館の駐車場の一角に雪でステージをつくり、そのステージ上で開催される。鉢集落の子どもによる松明行列やダンスの発表（ダンスは2019年のみ）、真生会の現役会員によるコント（2018年は悪天候のため中止となった）、福まきが行われる。福まきは真生会の現役会員数名が菓子やみかんを撒き、それを他の人々が拾い集めるものである。2018年は悪天候のためほんやら洞内で行われた。	18:00-
雪上大花火ショー	専門の業者に委託する本格的な打上げ花火である。花火はふるさと会館の裏山から打ち上げられる。費用は一口6,000円の寄付を住民などから募ってまかなわれる。	雪上カーニバル ショー終了後

フィールドでの調査を基に筆者作成

(2) 調査方法

筆者は2017年4月より、鉢集落において真生会を主な取材対象として参与観察やインタビューなどの質的調査を行っている。本稿で論じる内容は、その中でも2018年2月と2019年2月の2度実施した雪まつりに対する参与観察と、真生会の会員らに行ったインタビューに主に基づいている。

雪まつりは例年2月の第3土曜日に開催される。2018年は2月17日、2019年は2月16日である。両年とも、主な準備は同月第2土曜日から⁽¹⁶⁾毎日行われた。各曜日の作業開始時刻と関係団体⁽¹⁷⁾は表3の通りである。第2土曜日から月曜日までの3日間は、建国記念の日を含む3連休となる。そのため朝から一日がかりで作業を行う。翌火曜日と木曜日は、主に現役会員が夜19:30ごろから1時間半程度準備作業を行う。これは、平日の日中は現役会員の大半が仕事に出ているためである。ただし2018年の火曜日（2月13日）と2019年の木曜日（2月14日）は、日中にOB会員のみが集まり作業を行っている。また2018年の木曜日（2月15日）の日中には雪像制作が、集落と親交のある芸術家ら数名を中心に、現役会員2名が断続的に参加しつつ行われている。そして水曜日と金曜日は、仕事が休みあるいは休みを取ることのできる現役会員ならびにOB会員が、朝から一日がかりで準備作業を行う。金曜日には婦人会や老人会の人々も、それぞれが担当する準備作業を行う。雪まつり当日は朝8:00ごろから準備を開始する。雪まつり翌日の日曜日は、朝9:00ごろから昼前まで片づけを行う。片づけ終了後の午後14:00からは慰労会が開催され、雪まつりに関わる各団体の人々が参加する。そして翌々日の火曜日に現役会員のみが集まり、日曜に終えられなかった片づけや打合せを行う。

(16) 第1土曜日には「事務所開き」が行われる。事務所開きは、雪まつりの具体的な準備作業を開始する前に行う集会である。真生会の会員と、雪まつりに関わる各団体の代表をはじめ数名が参加して、打合せや懇親の酒宴を行う。

(17) もちろん、各作業日に各団体の会員が全員参加するわけでは必ずしもない。

表3 雪まつりの準備作業の開始時刻と関係団体

週	日	月	火	水	木	金	土
1							19:00ー全
2							8:00ー現・OB
3	8:00ー現・OB	8:00ー現・OB	19:30ー現	8:00ー現・OB	19:30ー現	8:00ー現・OB・婦・老	8:00ー全
4	9:00ー現・OB・婦		19:30ー現				

フィールドでの調査に基づき筆者作成。

「現」は真生会の現役会員、「OB」は真生会のOB会員、

「婦」は婦人会の会員、「老」は老人会の会員の略である。

塗りつぶしは参与観察の実施日（ただし火曜は2018年のみ）である。

筆者は以上の期間のうち、2018年には火曜日からの日曜日までの6日間、2019年には水曜日から日曜日までの5日間参与観察を行っている⁽¹⁸⁾。参与観察は常に可能な作業を手伝いながら行っている。例えば雪まつり当日は、主にほんやら洞酒場の屋台の運営に加わっていた。2018年は豚汁やおでんの提供、2019年は焼き鳥の提供を行っている。

真生会が主催する雪まつり以外の行事についても、それぞれ1－3回の参与観察を行っている。本稿で取り上げる盆踊り、石仏まつり、道楽神は、雪まつりと同様に準備の一部と本番、片づけの一部を含む日程で調査を行った。雪まつりに次ぐ規模の行事である石仏まつりは、5日間（2017年）、8日間（2018年）、3日間（2019年）の日程で参与観察を実施している。盆踊りは当日と翌朝の片づけ（2017、2018年）もしくは前日の準備（2019年）の2日間に、道楽神は2018年から2020年のいずれも当日のみに、それぞれ調査を行った。

また本稿で参照しているインタビューデータは次の3つである。インタビューの年代はいずれもインタビュー当時のものである。

1) 2018年3月10日、鉢集落で実施した真生会の現役会員へのインタビュー

現役会員E氏・Y氏（両者とも20代男性）へのインタビューを、13:00から15:15ごろまで対面で実施した。

2) 2019年6月22日、鉢集落で実施したトークセッション

住民A（60代男性）、M（30代女性）、Y（20代男性）の3氏と筆者によるトークセッションを、15:20から16:30ごろまで対面で実施した。筆者が企画に関与した、とある大学のスタディツアーにおいて行ったものである。A、Yの両氏は真生会の現役会員である。

(18) 参与観察を行っていない期間の作業開始時刻などは、参与観察中の聞き取りと真生会が作成する作業予定表に基づき把握した。

3) 2020年4月4日、オンラインで実施した真生会の現役会員へのグループインタビュー

真生会側の参加者は10名前後である。オンラインでの実施であったため、正確な参加人数は把握できなかった。インタビューは真生会の会議に参加する形で行った。筆者は19:00から19:46ごろまで会議に参加し、うち後半の20分ほどの時間でインタビューを実施した。

(3) 雪まつりの特徴

真生会の人々は雪まつりについて、鉢集落の人々が楽しむための祭りであることと共同作業の契機であることの二点を重視している。

雪まつりの第一義的な目的は、鉢集落の人々がともに楽しむことにある⁽¹⁹⁾。雪まつりに祀るべき「神」はおらず、40年近い歴史を有しているものの継承すべき伝統文化という性格も希薄である⁽²⁰⁾。また雪まつりには鉢集落の人々以外も来場可能だが、集客や「ほんやら洞酒場」を通じた経済的利益の獲得がことさらに目指されている訳でもない⁽²¹⁾。真生会の人々は雪まつりによって非日常的な交歓の機会を創出することをあくまで目指しており、実際にそのような機会になっていると考えられるのである。

雪まつりではまた、鉢集落の様々な団体に属する人々が協力して祭りを作り上げるという点も重要視されている。真生会の現役会員のT氏（60代男性）によれば⁽²²⁾、雪まつりは非日常的な交歓の機会を創出することに加えて、真生会と集落内の他の諸団体が一体となって取り組むことで地域の活性化を目指すものでもあったのだという。確かに雪まつりには、真生会が主催する行事の中でも団体数と人数の両面で最も多くの主体が関与する。例えば婦人会は、主に「ほんやら洞酒場」で提供する料理の仕込み作業を雪まつり前日から当日にかけて行う。老人会は、主に「ほんやら洞酒場」の装飾に用いる花餅の製作作業を行う。若妻会は、真生会がほんやら洞の製作を行う日にまかないづくりで参加するほか、雪まつり当日にはほんやら洞酒場で客から注文を受けたり商品を客席まで運んだりする。また真生会の現役会員のみならずOB会員が積極的に関わり、ほんやら洞の製作作業などで中心的な役割を果たす。雪まつりはいわば鉢集落の人々が総出で作り上げる祭りであり、この総出で作り上げるという側面が重要だと真生会の人々は考えているのである。

(19) 鉢集落の人々以外が訪れて楽しむことが重要でない訳ではないものの、鉢集落の人々が楽しめる祭りであれば意味がないという認識が確かにある。本稿ではこの第一義的な目的に焦点を当てるため、鉢集落の人々以外が楽しむことについては詳述していない。

(20) 小松和彦（1997）は神の祭祀を欠きながらも祭りのな非日常性を有する「イベント」の増加を指摘しているが、小松の区別に従えば雪まつりは「祭り」というよりは「イベント」に当てはまるだろう。

(21) この点に関して、来場者過多となり鉢集落の人々がほんやら洞に入れない状況が生じたため、集落外への宣伝を控えたことが過去にあったという。

(22) 2020年4月4日にオンラインにて実施した真生会へのグループインタビューより。

(4) 分析の視点と方法

祭りに際して共同作業を行うことを真生会の人々が重視している理由の一つは、それが祭りに限られない様々な共同作業を行えるようになることと密接に関連しているからだと考えられる。このことに関して、真生会の現役会員のA氏（60代男性）は、2004年10月の新潟県中越地震⁽²³⁾発生後の共同作業について次のように述べる⁽²⁴⁾。

中越地震の時に、やはりすごいこううまい連携で（中略）こういう大変なことが起きているのに、じゃあご飯みんなで作りましょう、はい米は誰々が、って言う前にもう持ってきてるとか、あの、ちっちゃい子に「お前味噌もってこーい、あっこんち行って味噌もってこーい」って全然知らないうちに行って味噌取りに行ったり、っていう。そんな行動がすごい、もう、うまーくできて、テント（筆者注：パイプテント）一つ立てることで、都会の人であれば「これどうやって立てるんですか？」っていうのが普通なんだけど、普段お祭りだ、運動会⁽²⁵⁾だ、ってテントを、もう、何気なく立ててる。だから、そういう非常時でも簡単に組み立てられる。という、そういう連携もあるし。

A氏はパイプテントの組み立てを例に、日頃の共同作業の積み重ねが、災害後の非常時での連携をうまく行えた要因の一つだと述べる。このうちパイプテントを組み立てる作業は、筆者が参与観察を行った2018年と2019年の雪まつりでは行われていない。だが盆踊りや石仏まつりなど他の多くの機会では、パイプテントが素早く組み立てられていく様子が見られた。パイプテントの組み立てを繰り返すことでそれを円滑に行えるようになったということは、容易に理解できる。だがA氏の言う「うまい連携」とは、パイプテントを組み立てるなどの個々の作業はもちろん、それを含む一連の共同作業を円滑に行えることだと解釈できる。鉢集落の人々は、祭りや運動会といった機会に共同作業を繰り返し実践することで、そのような共同作業を、災害時という経験のない状況でも適切に行えるようになっていたのだと考えられるのである。

人が祭りの実践を通じてその祭りの担い手へ形成されていくことを論じる研究では、その祭りに必要な知識や技能を新参加者が古参加者から習得する過程が、主な考察対象となってきた。例えば菅原和孝

(23) 2004年10月23日に発生した地震である。十日町市では17:56の本震で震度6弱、18:34の余震で震度6強を観測した。A氏によれば、鉢集落では死傷者は一人も出なかったものの、家屋は全壊1軒、半壊3軒などの被害が出たという。

(24) A氏を含む鉢集落の住民3名と筆者によるトークセッションより。2019年6月22日鉢集落にて実施。

(25) ここでの運動会とは、鉢集落および隣接する中手集落の2つを学区としていた旧十日町市立真田小学校の運動会を意味する。旧真田小の運動会は、地域総出で開催されていた。地域住民も参加して運動会の実行委員会が組織され、鉢集落の諸団体はそれぞれ1-2種目の企画運営を担った。子どもはもちろん大人も種目やその場を楽しむ行事だったという。

ら(2006)や榎本美香ら(2020)は、正統的周辺参加論⁽²⁶⁾を理論的枠組みとし、知識や技能が年長者から後継者世代へ言葉とともに伝えられるやり取りを主に分析して、知識や技能の継承過程の特徴を具体的に明らかにしている。また柴田彩子(2017)も、同じ正統的周辺参加論を枠組みとして、「道づくり」という共同作業を通じて移住者や非定住者に集落の一員として必要な知恵や技術が共有されていく過程を明らかにし、集落における共同作業の意義を学習の場という観点から捉え直している。確かに鉢集落の人々が行う共同作業でも、OB会員や年長の現役会員が若手の現役会員をたしなめ諭す場面はしばしば見られる。それが、若手現役会員が共同作業をよりよく行えるようになることに寄与していることは確かだと考えられる。だが鉢集落の祭りの場合には、共同作業の実践は、そのような古参者から新参者が学ぶ機会として以上に、共同作業を繰り返すことで習熟する機会として重要だと考えられる。パイプテントを例にとれば、その組立自体は、たとえ経験が浅くても行うことができる。だがパイプテントを、A氏が述べるように「何気なく立て」ることや、それを活用して祭りを作り上げることは、一連の共同作業を一定程度繰り返し経験してこそ可能になる。このような経験と習熟の過程が、伝統芸能のような形式性に乏しい鉢集落の祭りにおいては特に重要だと考えられるのである。

それゆえ本稿では、鉢集落の人々が祭りにおいて繰り返している、共同作業のあり方に着目する。真生会が主催している様々な祭りの中でも「雪まつり」を主に取り上げて、鉢集落の人々が行う共同作業のどのような特徴が、経験のない状況でも共同作業を適切に行えるようになることに結びついていくのかを考察していく。まず雪まつりについて、開催される祭りの実質とそれを実現するための共同作業の特徴を明らかにする。次にそのような特徴をもつ共同作業を繰り返し行うことで、人々が何をどのように行える主体へと形成されていくのかを論じる。最後に鉢集落で真生会が主催する他の祭りとの共通点を検討し、鉢集落のようなあり方で共同作業を行い祭りを開催することが、地域社会の担い手づくりとしていかなる可能性と限界を有するのかを明らかにする。

3 非日常的な交歓の機会としての雪まつりの実質

前節で述べたように、鉢集落の雪まつりは、鉢集落の人々がともに楽しむことを第一義的な目的としている。そして実際に非日常的な交歓の機会を享受できる祭りになっていると考えられる。

雪まつりにおいて、真生会をはじめとする鉢集落の諸団体に属する人々が協力して準備し来場者へ提供する内容は、様々な催し物と飲食物、そして多数の人が一堂に会しそれらを味わえる空間の、大きく三つである。

雪まつりで行われる「ほんやら洞酒場」では、手づくりの屋台で様々な飲食物が提供される。焼

(26) レイヴとウェンガー(1993)が提唱する、徒弟制研究に基づく学習理論である。正統的周辺参加論では、社会的実践を、その実践を共にする人々からなる集団としての実践共同体へ参加する学習のプロセスとして捉える。新参者は正統的周辺参加、つまり実践共同体への参与を通じて、当該実践共同体の「実践の文化」を学習し、十全的参加へ移行し古参者になっていくとされる。



図2 製作途中のほんやら洞（2018年2月14日，筆者撮影）
写真左手の建物は集会施設「ふるさと会館」である。

き鳥や鮎の塩焼きは炭火焼き，豚汁やおでんは婦人会による手づくりである。日本酒は1杯約1合の熱燗が100円で提供され，甘酒は無料でふるまわれる。そしてそれらの催し物や飲食物を大人数が一堂に会して味わうために，最も重要な設えはほんやら洞である。ほんやら洞は集会施設「ふるさと会館」裏手の，普段畑として使われている場所に雪や単管パイプによってつくられる（図2，3）。70～80人程度を収容できるため⁽²⁷⁾，一度に多数の人がほんやら洞酒場などの催し物を同じ空間内で楽しむことができるのである。

雪まつりで準備・提供されるこれら三つはいずれも，雪まつりの非日常性や楽しさを生み出すことへと結びついているだろう。至近距離で鑑賞できる音楽ライブや打上げ花火，直火や大鍋で提供される料理など，雪まつりでのみ味わうことのできるものは多い。ほんやら洞もまた，雪まつりのためだけに作られる特別な空間である。そして真っ白な雪の壁や電球の明かり，花餅や地炉端などの装飾品，屋台から立ち上る湯気や煙などが，幻想的⁽²⁸⁾な雰囲気醸し出している。

(27) 調査で撮影した複数の写真をもとに筆者が概算した。

(28) 2018年の雪まつり当日，真生会のある現役会員が湯気の立ちのぼるほんやら洞酒場の光景に「幻想的だよな」と呟っていた。

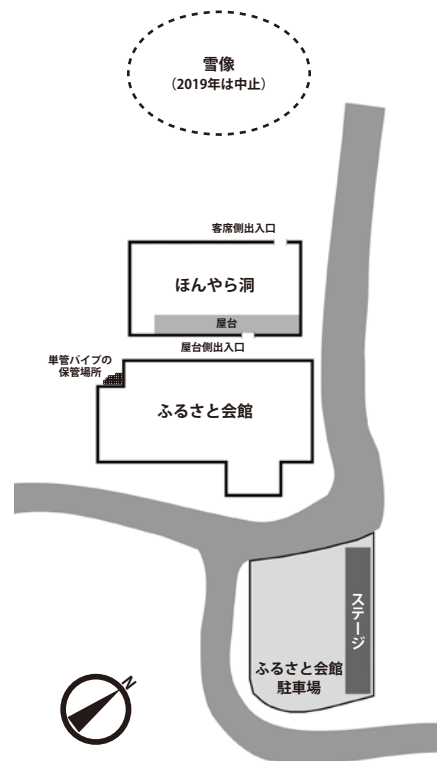


図3 ふるさと会館とほんやら洞の位置関係
（筆者作成）

だが雪まつりの実質は、それらの個々の要素というよりは、それらを介した「楽しむ行為の実践」にあると考えられる。すなわち実際にそこに多数の人が参加し、様々な催し物や飲食物を介しつつ空間を共有し楽しむ行為を実践することこそが、雪まつりにおける非日常的な交歓なのである。例えば催し物の一つである「お楽しみ芸能ショー」は、出演者の優れたパフォーマンスに大勢の観客の盛り上がりと呼応して、全体としての賑やかな雰囲気が作り出されていた。兩年とも11時の本番開始前にリハーサルが行われたが、リハーサルに対しても手拍子や拍手が起こり、リハーサルの1曲目の演奏が終わった際に早くも「アンコール！」と声を上げる人もいた。「アンコール！」の声は本番中も起こり、とりわけ2019年は予定の時間を過ぎて幾度もアンコールを重ねた。お楽しみ芸能ショーの賑やかさは、そこが「酒場」であることや雪の壁で覆われた特別な空間であることによって一層高められる。そのように作り出される全体としての賑やかな雰囲気を、その場の全員で享受し楽しむ行為の実践が、雪まつりにおける非日常的な交歓の実質だと考えられるのである。

4 雪まつりにおける共同作業の特徴

真生会の現役会員をはじめとする鉢集落の人々は、様々な催し物や飲食物、ほんやら洞などの設えの準備や片付け、それに当日の運営を共同作業で行い、前節で見たような祭りを実現している。以下では準備や片づけ、および当日の運営における共同作業の特徴を、いくつかの具体的な場面を取り上げつつ論じていく。

(1) 雪まつりの準備や片づけにおける共同作業の特徴

雪まつりの準備や片づけにおける共同作業の特徴としてまず挙げられるのは、作業が円滑に進む点である。例えば雪まつりの中心的な設えであるほんやら洞の骨格を単管パイプで組み上げる⁽²⁹⁾際には、一連の作業が途切れることなく続けて行われる。まず、組み上げに使用する単管パイプを会場裏手の保管場所⁽³⁰⁾から製作場所へと運び出す。運び出しはバケツリレー方式で行い(図4)、組み上げに都合のいい位置まで一本一本を運ぶ(図5)。そして単管パイプの本数がある程度揃えば、運び出しが終わらないうちから徐々に単管パイプを組み上げる作業へと入っていく(図6)。単管パイプの運び出しを行っていた人はそれが終わり次第組み上げ作業に加わっていく(図7)。これらはほんやら洞製作作業全体の一部分だが、設えをつくる共同作業の様子はおよそ共通している。一連の作業を構成する個々の工程は、現場で明確に区別されてはいない。たとえある工程が完了していなくて

(29) ほんやら洞の製作は2018年と2019年のいずれも、真生会の現役会員とOB会員の手によって主に雪まつり本番直前の水曜日に行われた。ここで記述する内容は主に2018年の製作作業の参与観察に基づく。なお、雪でできた壁面は、筆者が雪まつりの調査を開始する以前の作業日に既に完成していた。

(30) 単管パイプはふるさと会館の裏手にまとまって保管されている。ほんやら洞との位置関係については図3を参照されたい。



図4 単管パイプの運び出し
(2018年2月14日, 筆者撮影)



図5 組み上げに都合のいい位置へ運ばれた単管パイプ
(2018年2月14日, 筆者撮影)



図6 運び出しが終わる前から単管パイプの組み上げ
を始める (2018年2月14日, 筆者撮影)



図7 運び出しを終えて単管パイプの組み上げに加わる
(2018年2月14日, 筆者撮影)

も、可能なら次の工程へ入ったり、同時並行で他の工程を進めたりする。このような方法で作業が円滑に進んでいくのである。

作業の円滑さは、一人ひとりが必要な作業を自律的に進めることで生まれていると考えられる。ほんやら洞の製作は、職業の関係で単管パイプの扱いに長けた現役会員1名とOB会員2名の合わせて3名を中心に行われる。だが中心となる3人が作業の場全体に対して一方的に指示する場面は多くない。中心となる3人以外の人でも、基本的に誰かの指示がなくても自らの判断で作業を進めており、中心となる3人と意見を言い合う場面もしばしば見られる。また作業時の役割分担が事前に細かく決められていたり、作業の内容や方法がマニュアルとして明文化されていたりすることもない。真生会の現役会員とOB会員の一人ひとりが行うべき作業を自律的に判断して遂行しているため、誰かの指示や事前の細かな取り決めがなくても共同作業が進み、そしてその進み方も結果的に円滑になっているのだと考えられる。

共同作業の円滑さと自律性という特徴は、雪まつり前日の準備では一層顕著に見られる。雪まつり

前日の金曜日には、ほんやら洞の完成や各催し物の実施に向けた細かな作業が、1日ばかりで一斉に行われる。ほんやら洞酒場で提供するアユやカジカの仕込み、長机やストーブの設置、物品の確認や買い出し、昼夜のまかないの準備など、行うべき作業は枚挙にいとまがない。それらの作業は近接しながらも異なる場所で、同時並行で進められる。例えば食品やまかないの準備はふるさと会館の台所、長机やストーブの設置はほんやら洞、物品の確認はふるさと会館内の広間でそれぞれ行われる。この際、各作業の担当者や全体のスケジュールは大まかにしか決められていない。一人ひとりが優先度や手順を考えて自律的に作業を進め、手があげば別の作業へ移る。そうして作業を一つひとつ円滑にこなして、最終的に全ての必要な準備を終えているのである。

ただし、雪まつりの準備や片づけにおける共同作業は確かに円滑かつ自律的だが、全く途切れることなく機械的に進行するという訳ではない。各現場では不備が明らかになり作業をやり直す場面や、作業の手を止め相談する場面もしばしば見られる。例えばほんやら洞の製作作業では、垂木のように屋根を支える役割を果たす単管パイプや、飲食物を提供する屋台の骨格となる単管パイプを固定する位置を、その作業に関わる人々がそれぞれ目視や巻尺などで確認し合いながら決めていく。2018年には、この単管パイプの固定位置が一度決められた後に変更され、作業がやり直される場面が何度も見られた。あるいは2019年の雪まつり終了後、ほんやら洞を解体し単管パイプを所定の保管場所へ戻す際には、パイプの長さや保管場所に運び入れる順番について相談しながら作業が進められた。ほんやら洞の製作に用いる単管パイプには3m、4m、6mの三種類の長さがある。3mと4mのパイプは、目視では区別がしづらい。それゆえある現役会員は、単管パイプの扱いに長けたOB会員にどれがどの長さのパイプかを幾度も確認していた。また保管場所に運び入れる順番も、保管場所でパイプを整理する作業の状況に応じて途中で幾度か変更していた。この他にも、2018年にはほんやら洞の製作に必要な単管パイプやクランプの不足が作業途中で明らかになり、所定の保管場所や倉庫へ補充しにいく場面があった。

以上のようなやり直しや相談が見られるのは、各作業の内容はおおよそ定まっているものの、それをどのように行うか細部まで明確に定まっておらず、現場での判断に委ねられている部分が多いからだと考えられる。例えばほんやら洞全体の骨格や、出入口や屋台などの各部分に関して、おおよそその形や位置関係は共通の了解事項になっていると考えられる。だが単管パイプやその他の部品一つひとつの組み合わせ方が厳密に決まっていたり、寸法が数値化されていたりするわけではない。それゆえやり直しや相談がしばしば行われ、そしてできあがるほんやら洞も年によって細部が異なるものになるのだと考えられる。筆者が参与観察を行った2018年と2019年の雪まつりでは、単管パイプの組み方や出入口のつくり方などで異なる部分が見られた（表4）。

現場での判断に委ねられている部分が多いことは、不要なやり直しや相談を生じさせ共同作業を非効率的なものにする側面がある一方で、現場の人々が自らの判断で工夫をして共同作業の質を高めることを可能にしてもいると考えられる。例えば2018年には屋台の店員側と客席側とが完全に隔てられているが、2019年には屋台の一角にすき間が設けられている（表4「①単管パイプの組み方」各写真の点線枠内参照）。これにより、必要がある際に屋台の店員側と客席側とを行き来することが容易

表4 ほんやら洞の細部に見られる相違点

異なる箇所	2018年	2019年	具体的な相違点
①単管パイプの組み方			ほんやら洞の屋根を頂点で支える棟木の役割を果たすパイプの真下に並行して3本のパイプが組まれている。2018年には3本とも棟木のパイプと同じ長さだが、2019年はうち1本が短い。これらと関連するパイプの組み方にも異なる部分が散見される。
②出入口のつくり方			用いている扉は同一だが、扉を栓づけるベニヤ合板や角材の組み方が異なる。扉が自動で閉じられるようにするための重り（点線枠内参照）も、2018年は一升瓶だが2019年はビール瓶である。
③屋台のつくり方			焼き鳥を焼く箇所（点線枠内参照）には、煙に含まれる油分で屋根のシートを汚さないためのブルーシートや、火災防止用の石膏ボードが取り付けられる。2018年と2019年ではブルーシートの取り付け方が異なる。また2018年は石膏ボードが客席側に対してむき出しだったが2019年はベニヤ合板で覆われている。

フィールドでの調査を基に筆者作成

になっているのである。現場での自律的な判断による工夫は、作業の進め方に関しても見られた。真生会には電気配線の工事などを仕事で行っている人がおり、雪まつりの各会場に必要な電気配線の準備などを例年担当している。その現役会員がある作業日に、他の人が作業を終えた後も一人居残って電気配線の準備を進めていた。準備作業全体の進行状況に鑑みて、その電気配線の準備ができていなければ翌日の作業に支障をきたすから行っていたと、その人は語っていた。電気配線関係の作業が他の作業の前提になる状況は雪まつりの片づけの際にも存在し、その会員は2019年の雪まつりの片づけ作業時に、他の人よりも早く現場へ到着し電気配線の撤去作業を進めていたと、後に語っていた。この電気配線作業を担当する現役会員は、作業状況に鑑みて居残りや早出が必要だと自ら判断して作業を行い、共同作業全体の円滑な進行に寄与していたのである。

以上のように、雪まつりの準備や片づけにおける共同作業は、基本的に円滑かつ自律的に進む。だが途切れることなく機械的に進む訳ではなく、やり直しや相談もしばしば行われるという特徴ももっている。これは各作業の細部が曖昧で現場での判断に委ねられている部分が大きいからだと考えられる。このような方法には非効率な側面があるものの、作業全体としては大きな問題が生じることなく行われており、さらに現場の人々の自律的な判断で工夫し共同作業の質を高めることを可能にしているのである。

(2) 雪まつり当日の運営における共同作業の特徴

雪まつり当日の運営における共同作業も、準備や片づけと同様に円滑に進んでいく。

雪まつり当日に提供する催し物や役割分担は、事前におおよそ定まっている。婦人会はふるさと会館で飲食物の仕込みを、若妻会はほんやら洞内での接客をそれぞれ主に担当する。真生会はOB会員含めほんやら洞酒場の屋台やその他の催し物の運営を行う⁽³¹⁾。各団体の人々は、以上の役割を現場の状況に応じながら果たしていく。

雪まつり当日は、様々な催し物やその準備が同時進行する。ほんやら洞酒場は雪まつり開始から終了まで常時開店している。真生会の人々はほんやら洞酒場の屋台を運営しながら、他の様々な催し物の準備や本番を行う必要があるのである。それゆえほんやら洞酒場の屋台では、各催し物の担当者が一時的に抜けるために一箇所の担当人数が少なくなったり、一人が二箇所以上を掛け持ちしたりすることが頻繁に起こる。それでも真生会の人々は、必要な役割をその場で相談しつつ分担して、ほんやら洞酒場も他の催し物も円滑に実施しているのである。

さらに個々の役割においても、時々の状況への適切な対応が求められるものが少なくない。例えば屋台の中でも焼き鳥は、他の飲食物に比べて準備に時間がかかる。そのため、ほんやら洞が混雑し焼き鳥がよく売れる時間帯などを考慮して運営する様子が顕著に見られた。まず雪まつり当日開店前の準備作業は、他の屋台よりも早い時間から行われる。準備作業では、焼き鳥を焼くための木炭への点火を、豚汁用に用意されたガスコンロを使って行っていた。火力の強いガスコンロを使うことで効率よく火を起こし、焼き鳥を早く焼き始められるようにしているのである。そしてほんやら洞酒場の開店前から、焼き上げを次々と進めていく。予め用意しておいた発泡スチロールの箱を保温容器として活用して、ほんやら洞酒場がとりわけ混雑する11:00から13:00ごろまでの時間帯に迅速に提供できるようにしていた。また雪上大花火ショー後の混雑を見越して、花火ショー終了後には他の人々よりも迅速にほんやら洞酒場へ戻り、一度焼き上げた焼き鳥を再び火にかけていた。ほんやら洞酒場における焼き鳥の屋台は、担当する人々が以上のような対応を行うことではじめて滞りない運営が可能となっているのである。

また、2018年と2019年は雪まつり当日の天候が雪であった。そのため例年屋根のないふるさと会館の駐車場で行っている餅つき大会を、ほんやら洞の中で行った。ほんやら洞の出入り口には履き物を着脱するためのスペースが設けられているが、そこに場所をつくって餅つき大会を実施した。真生会の人々は餅つき大会で使用する杵や臼をほんやら洞まで運び、餅米を蒸す作業もほんやら洞の出入り口付近で行っていた。婦人会の人々は出入り口に近い客席を一時的に占有して、つき上がった餅の取り分けや味つけを行った。以上のような対応を行うことで、餅つき大会は空間的な制約を受けながらも滞りなく実施されていた。

それぞれの役割を他の役割や混雑状況、天候などに応じてどのように果たすべきかは、細部まで明

(31) 老人会の人々については、雪まつり当日に特段の役割があるわけではない。当日客として雪まつりを楽しむ姿が見られるのみだった。

確に定まってはならず、現場での判断に委ねられている部分が多い。雪まつりの運営に関わる人々は、各現場で自律的に判断あるいは相談してそれぞれの役割を果たし、雪まつりを問題なく運営しているのである。

そして当日の運営ではさらに、雪まつり当日の運営を問題なく行える限りにおいて可能となるような、雪まつりをよりよい交歓の機会にするための様々な工夫が見られる。中でも注目したいのは、子どもにほんやら洞酒場の手伝いをさせてあげることと、真生会や他の諸団体の人々の多くが飲酒しながら雪まつりの運営に当たることである。

まず前者について、2018年と2019年いずれの雪まつりでも、当時小学生の女子数人が一時的に手伝う姿が見られた。具体的には、その場で「手伝いたい」と声をあげた子どもに、現場の人々が衛生管理のためにかぶる紙製の帽子と商品を運ぶ際に用いるお盆を一人一つ手渡し、ほんやら洞酒場の来場者から注文をとったり商品を注文者に運んだりといった手伝いをさせてあげていた。これにより子どもたちは雪まつりをよりよく楽しむことができていたのである。次に後者について、飲酒は、雪まつりの運営に関わる人々が自らもまた祭りを楽しむ上で重要な要素である。飲酒しながら雪まつりの運営に当たることで、来場者が楽しむことを可能にしつつ、自らもまた雪まつりの非日常性を十分に楽しむことができていたのである。

子どもにほんやら洞酒場の手伝いをさせてあげることに関して、事前の計画や準備はない。あくまでも子どもたちがその場で自発的に「手伝いたい」と声をあげ、ほんやら洞酒場を現場で運営する真生会や若妻会の人々がその声に応じて何らかの手伝いをさせてあげる、という構図になっている。飲酒についても同様に、雪まつり当日にいつどの程度の飲酒をするかは各人の判断に委ねられている⁽³²⁾。そしてこれらはいずれも、雪まつりを問題なく運営する上では潜在的なリスクである。子どもの手伝いには、商品をこぼすことによる衣服の汚損や火傷などの危険性がある。事故なく手伝いが行われるためには、適切な指示や助言を与える必要があるが、それは元より担うべき役割と同時並行で行わなければならない⁽³³⁾。また酒は「ひとを粗暴にする、行動の抑制が効かなくなる、注意が散漫になる、気力が失せる」(鷲田 1995: 5) という特徴をもつ。ほんやら洞酒場の屋台では食品の衛生管理や加熱器具の安全利用を中心に事故のない運営が求められるが、飲酒が適量を超えればそれが困難になる可能性があるのである。それゆえ子どもにほんやら洞酒場の手伝いをさせてあげることや飲酒しながら

(32) 真生会の現役会員やOB会員は、早い人であればほんやら洞酒場が午前10時に開店する前から缶ビールや日本酒の熱燗を飲み始める。

(33) 例えば2018年2月の雪まつりでは、真生会のある会員は、「お客さんのところ回って注文とってこい」と子どもたちに伝えた。子どもたちは実際に「ほんやら洞酒場」の来場者に注文を聞いたり、できあがった商品を注文者のところまで運んだりといったことを始めた。若妻会の人々は自らもほんやら洞酒場での接客を継続しつつ、子どもたちに「気をつけて」と声をかけたり、一度にお盆に載せて運ぶ商品の数を減らさせたりしていた。何をどのように手伝えばいいのかを具体的に伝え、さらに手伝う様子を適度に気にかけることで、可能な手伝いを可能な範囲で子どもたちにさせていたのである。

ら雪まつりの運営に当たることは、想定されるリスクに対処し運営を問題なく行える限りにおいて、現場での判断で行える工夫だと理解できる。雪まつりの運営に関わる人々は以上のような工夫をすることで、雪まつりを鉢集落の全員でよりよく楽しめる祭りにすることができているのである。

(3) 小括：雪まつりにおける共同作業の特徴

雪まつりの準備や片づけ、そして当日の運営における共同作業に共通する特徴は、作業が円滑かつ自律的に進む点である。一つひとつの作業の内容や役割分担、スケジュールなどはおおよそ定まっており、真生会や他の諸団体の人々の間で理解が共有されていると考えられる。だが具体的な方法や進め方には曖昧さがあり、現場での判断に委ねられている部分が大きい。それゆえ各現場の人々が自律的に判断・相談しながら作業を行っているのである。

共同作業の以上のようなあり方は、とりわけ準備や片づけの際に不要な相談ややり直しを生じさせ、作業を非効率的なものにする側面がある。だがその一方でいずれの共同作業においても、現場での判断に基づく時々の状況への対応や様々な工夫が重要な役割を果たし、共同作業の質を高め雪まつりを鉢集落の全員でよりよく楽しめる祭りにすることを可能にしていると考えられるのである。

5 試行錯誤を伴う共同作業の慣習化

雪まつりにおける共同作業は、各現場での自律的な判断・相談に基礎づけられている。ということは雪まつりの運営に関わる人々は、共同作業に対して一定の自律性を共有しているということである。この自律性がどのようなものなのかを、本節では「慣習」という観点から考察していく。

筆者は真生会のある二人の現役会員（E氏とY氏、両者とも20代）に実施したインタビュー⁽³⁴⁾で、雪まつりなどの真生会の活動における様々な作業の内容や方法が、およそ決まっているように見えるが完全に確立されてはならず、それゆえ方法を変えたり作業をやり直したりする場面が見られる点について尋ねた。するとE氏は「本当は、紙に、データに起こしてね、残しときゃいいのかも知んないけど、なんだろうね……なんでしょうね……？笑。」と言い、記録に残すなどして作業の内容や方法を確立させようとししない理由はよく分からない様子だった。例えば『あれがねえ』『これがねえ』と物品等の不足が明らかになり、急遽会計担当者が買い出しへ行くことも「よくある」ことだという。それでもE氏は、「まあ慣例化してるからね。感覚で、やってるんじゃないの？」「でもまあ、みんなが大体やることわかってるから何とかなるんじゃないか？うん。」と述べる。つまりE氏は、雪まつりにおける共同作業は慣習化しており、その遂行に必要な知識や技能を作業に関わる人々がおおよそ共有しているため、たとえ変更ややり直しを伴うとしても問題なく活動を遂行できているのではないかと考えているのである。

(34) 2018年3月10日、鉢集落にて実施。

確かに雪まつりの準備から本番、片づけに至るまでに行う事柄は、少なくとも筆者が調査を行った2018年と2019年はほとんど同一であった。また主要な催しである「ほんやら洞酒場」は要するに仮設の飲食店であるが、このような仮設の飲食店は、名称や会場のつくりにも異同はあるものの1981年の第一回目の雪まつりから継続して実施されている⁽³⁵⁾。すなわち雪まつりにおいて、共同作業はおおよそ同一の内容を毎年繰り返す静態的な側面をもっている。このことが作業の遂行に必要な知識や技能の共有、そして共同作業の問題ない遂行を可能にしていると、基本的には理解できる。

だが雪まつりにおける共同作業には、細部が曖昧で現場での判断に委ねられている部分が大きいため、微視的には年によって異なる方法や進め方で行われるという動態的な側面がある。その動態性は時々の状況に応じて問題なく作業を遂行することや、現場の判断で様々な工夫をすることと関連しており、これらはいずれも雪まつりを実現する上で不可欠である。E氏の言う「みんなが大体やることわかってる」ため「何とかなる」とは、単に同じことを機械的に反復できるということではなく、その場の状況への対応や様々な工夫を各現場で自律的に行い、雪まつりを問題なく、さらには鉢集落の全員で楽しめるようなあり方で実現できるという意味だと解釈できる。それゆえ雪まつりにおける共同作業を遂行できることは、同一内容の繰り返しという静態的な側面からだけでは十分に説明できない。

ここで参考になるのは、慣習に関する福島真人（2010）の議論である。福島は、慣習やルーティンといった言葉には確かに「否応なく静的な、固定したパターンを連想させるところがある」（福島2010：81）が、あるルーティンワークをこなせることは「停滞した固定的な状態」（同）ではなく、技能が漸次的に向上した特定の段階を示しているのだと指摘する。すなわちある作業が慣習化していくことは、作業に伴う試行錯誤が微細化していく過程であって、全く試行錯誤が生じなくなることでない。慣習化している作業には、たとえどれほど技能が向上していたとしても、試行錯誤が微細であれ必ず伴うものなのである。

慣習化を技能の漸次的向上により試行錯誤が微細化していく過程として捉えるならば、まず雪まつりにおける共同作業では、様々な試行錯誤が行われていると理解できる。準備や片づけにおける共同作業では、試行錯誤は現場での変更ややり直しなどの形で顕在化しており、その痕跡を年によって異なる単管パイプの組み方などに見て取ることができる。また雪まつり当日の運営における共同作業でも、準備や片づけほど顕在的ではなくても、現場で判断あるいは相談しながら作業を進める過程は少なからず試行錯誤を伴うものであるはずである。そしてそれでも問題なく共同作業を行えるのは、このような「試行錯誤を伴う共同作業」それ自体が慣習化している、すなわち様々な試行錯誤を繰り返すことで試行錯誤を問題なく行える程度に技能が向上しており、その意味で試行錯誤はたとえ顕在的であっても十分に微細化しているからだと解釈できる。雪まつりの運営に関わる人々は、共同作業の過程で試行錯誤を繰り返し行いながら、問題なく作業を遂行したり様々な工夫をしたりする経験を積み重ねている。「試行

(35) 第一回目の雪まつりを開催した当時真生会の会長だった人によれば、「鉢のチャパレー」という名称で「タヌキ汁あり、ラーメン、ウドンソバ、肉まん、おでん、酒、甘酒と大変にぎやか」な催しを行ったという（真生会1992：5）。

錯誤を伴う共同作業」が慣習化し、その遂行に必要な知識や技能を共有しているからこそ、雪まつりの運営に関わる人々は、共同作業を自律的に進めることができるのだと考えられるのである。

雪まつりにおける共同作業の慣習化が以上のようなものだとすれば、雪まつりの運営に関わる人々が共有している自律性は、共同作業を行う経験に基礎づけられており、その意味で一定の限界をもっているはずである。しかし一定の限界の中では、経験したことと同一の事柄を繰り返すにとどまらず、時々の状況への対応や様々な工夫を行うこともできるものだと考えられる。雪まつりの運営に関わる人々が共有する自律性は、いわば「何でもできる」わけではないが状況に応じて「何とかすることができ」、さらには現場の判断で工夫して「よりよくできる」ようなものである。それゆえにこそ雪まつりは、参加する鉢集落の人々全員が楽しめるような形で開催することができている。

次節では真生会が主催する他の祭りとの共通点と相違点について考察し、鉢集落の人々が祭りにおける共同作業を通じて共有する自律性の限界と可能性を明らかにする。

6 祭りにおける共同作業を通じて共有する自律性の限界と可能性

第2節で見たように、真生会は雪まつり以外にも様々な祭りを主催している⁽³⁶⁾。表1で示した通り、いずれの祭りも、開催場所や催し物の具体的な内容の大部分は異なる。雪まつりにおけるほんやら洞のように、各祭りに特有の設えもある。例えば石仏まつりでは、鉢の石仏⁽³⁷⁾内にある小さな広場状のスペースに、単管パイプなどを用いて特設ステージがつくられる。道楽神では「道楽神」⁽³⁸⁾が、竹やワラ、正月飾りなどを円筒形に組み上げてつくられる(図8)。しかし、多数の人が一堂に会せる場や共に楽しめる飲食物や催し物を設えて運営するという大きな枠組みは、いずれの祭りにも共通している。そして個々の設えや祭り当日の運営に関しても、雪まつりと重なる部分は少なくない。

例えば石仏まつりでは既述の特設ステージの前部に、ブルーシートやござ、長机などを使って多数の人々が座って団欒できる場所がつくられる。このような団欒場所の作り方は、使用する資材やその組み合わせ方が雪まつりのほんやら洞の客席部分とほとんど⁽³⁹⁾同一である。また雪まつり以外の祭りでも仮設の屋台がつくられる。屋台の規模や提供される商品は異なる⁽⁴⁰⁾ものの、表5のような資材を必要に応じて組み合わせてつくられる点は基本的に同一である。このように各祭りでは、屋根や床、

(36) 盆踊りは絵本と木の実の美術館との共催であり、企画や運営の全てが鉢集落の人々の手でなされるわけではない。

(37) 「鉢の石仏」は十日町市の指定文化財である。起源は、禅僧・明屋有照によって1750年からの13年にわたる工事により開かれたことだとされる。本尊の十三仏や大正時代に加えられた百庚申などの仏教関連石造約200体が、石仏山と呼ばれる集落の最奥部に点在している。

(38) 「道楽神」は催し全体の名称であり、かつその際につくられる円筒形の構造物の名称でもある。

(39) 石仏まつりでは、地面の上に直接ブルーシートを敷き、その上にごさを重ね長机を設置している。これに対して雪まつりでは、踏み固めて平らにした雪面とブルーシートの間に、防寒などのためにベニヤ合板が敷き詰められる。

(40) 盆踊りでは焼きそばと飲料の販売が行われる。石仏まつりでは焼き鳥や焼きそば、飲料の販売に加えて、射的や金魚すくい、玩具の販売なども行われる。道楽神では温かい甘酒や白湯が来場者にふるまわれる。



図8 道楽神（2018年1月14日，筆者撮影）

表5 鉢集落の祭りで使われる主な資材

	単管パイプ	パイプテント	ベニヤ合板	鋳物コンロ	投光器
使用例	 石：2019年9月7日	 石：2019年9月7日	 盆：2017年8月12日	 石：2018年9月1日	 盆：2017年8月12日
主な用途	焼き鳥などの屋台、仮設のステージなどの骨格をつくる。	屋台などの屋根をつくる。電球や装飾品を支持する。	屋台の作業台や荷物置きをつくる。	プロパンガスを燃料に、屋台のコンロとして用いる。	屋台や会場全体の夜間の照明として用いる。
使われる祭り	石、雪	盆、石、道（2019、2020は不使用）	盆、石、道、雪	盆、石、道、雪	盆、石、雪

フィールドでの調査を基に筆者作成。「盆」は盆踊り、「石」は石仏まつり、「道」は道楽神、「雪」は雪まつりの略。

照明、焔炉、作業台といった要素を有する設えが、共通の資材を組み合わせ作り上げられているのである。そしてそのような設えをつくる際の共同作業も、雪まつりと同様現場での自律的な判断で時々の状況に対応しつつ、様々な工夫もしながら進められる。それゆえ共同作業は円滑で、なおかつ結果として出来上がる設えの形も毎年細部に異なる点が多いのである（表6）。

祭り当日の運営における共同作業で行う事柄やその進め方にも、設えと同様の共通性が見られる。例えば、屋台で提供する飲食物は各祭りで異なるものも多いが、加熱器具を用いて飲食物の調理や提供を行うという点は全ての祭りに共通している。また屋台や催し物の運営も、準備や片づけにおける共同作業と同様、現場の状況に自律的に対応しつつ様々な工夫をする形で行われる。雪まつり以外の祭りは催し物の種類が比較的少なく、役割と担当者の対応関係もより安定している。だが各役割をどのように遂行するかは現場での判断に委ねられている部分が大きく、真生会の人々は当日の天候への対

表6 設えに見られる相違点

石仏まつり	道楽神
	
	
2017年はステージと客席の付近にPAブースのみがあり、屋台は別の場所に集約されている。2019年はPAブースに加えて、焼き鳥や玩具を販売する屋台なども客席付近に設けられている。	道楽神とほこら（点線枠内）の位置は共通だが、甘酒などをふるまう屋台の位置やつくりが異なる。2019年は雪が降る予報ではなかったため、パイプテントは不要と判断された。

フィールドでの調査を基に筆者作成

応⁽⁴¹⁾や混雑状況に応じた屋台の運営⁽⁴²⁾などによって祭りを安全かつ滞りなく運営しつつ、石仏まつりと盆踊りでは雪まつりと同様に飲酒しながら運営に当たり、他の来場者とともに祭りの非日常性を楽しんでいる。盆踊りではまた、子どもの要望に応じて手伝いをさせてあげる様子も見られた。

以上のように、真生会が主催する様々な祭りでは、それらに通底する「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業が、異なる場所や具体的内容で、しかしおおよそ共通のメンバーで、おおよそ共通の資材を活用して、おおよそ共通の進め方で繰り返されている。つまり雪まつりにおける共同作業で生じている「試行錯誤を伴う共同作業」の慣習化は、より大きな枠組みで「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業の慣習化だと捉えることができる。そして共同作業を通じて共有する自律性も、雪まつりや石仏まつりといった個々の祭りに対するものであると同時に、「多数の人が

(41) 例えば2017年の盆踊りの際は天候が雨だった。真生会の現役会員はパイプテントなどで屋台をつくり、手作りの焼きそばや缶ビールなどの飲み物を販売していた。屋台には丸椅子を用意し、真生会の人々の多くはそこに腰掛けながら屋台の運営に当たっていた。丸椅子は当初雨に濡れない荷物置きとしても利用していたが、盆踊りの開始時刻が近づき真生会の人々が揃うにしたがって椅子が不足していった。ある現役会員はこの状況に、余剰になっていた作業台用のベニヤ合板を使って雨に濡れずに荷物を置けるスペースを設けることで対処していた。

(42) 石仏まつりにおける焼き鳥の屋台や、盆踊りと石仏まつりにおける焼きそばの屋台では、雪まつりにおける焼き鳥の屋台と同様に準備にかかる時間や混雑する時間帯を考慮して調理・販売を行っていた。

満足できる場を設え運営する」こと一般に対するものでもあると考えられるのである。

メンバーや資材、行う事柄やその進め方の共通性は、祭りにおける共同作業を通じて共有する自律性の、限界と同時に可能性の条件になっていると考えられる。それらの共通性が低減すれば、「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業の円滑かつ自律的な遂行は当然困難になるだろう。例えばメンバーが大幅に変わったり、日頃用いている資材の大部分が使えなかったりするような場合には、よりよく楽しめるような場をつくることはもちろん、共同作業を問題なく遂行することすらできない可能性もある。だがそれらの共通性が一定程度担保される限りにおいては、経験のない状況においても「多数の人が満足できる場を設え運営する」ことが可能になるのだと考えられる。

祭り以外にも、例えば鉢集落では「ツールド妻有」⁽⁴³⁾というサイクリングイベントの際に、給水ポイントを設置してレース参加者に飲料水や自家製の漬物などをふるまう活動を行っている。この給水ポイントは、集落内の県道脇にパイプ TENT などをを用いて設えられる。この活動も「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業の一つとして捉えられるだろう。「多数の人が満足できる場を設え運営する」ことは、祭り以外でも、人々が集団で何かを成し遂げる際に必要となる場合が少なくない。そしてそれが鉢集落で実際に必要になった場面の一つが、中越地震発生後だった。真生会の現役会員 A 氏によれば⁽⁴⁴⁾、中越地震が発生した当日、17:56 の本震から間もない 18:00 過ぎから、集落の役員や消防団の人々と相談しながら、各戸を回っての安否確認や避難場所の設営や炊き出しを行ったという。避難場所はふるさと会館の天井が崩れる危険性を考え、ふるさと会館前の屋外に設置した。パイプ TENT を 3 基設営し、照明は発電機と投光器で確保した。そして反射式ストーブなど電気を使わない暖房器具を集めて、暖を取れるようにした。炊き出しは婦人会に依頼した。個人の家からガス釜を集め、プロパンガスを使って炊飯を行いおにぎりを用意した。以上の作業を地震発生から約 3 時間が経った 21:00 ごろにはやり遂げ、出来上がった避難所に高齢者や子供優先で入ってもらいながら、炊き出しのおにぎりを食べることができたという。様々な祭りに際して「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業を繰り返し経験しているからこそ、鉢集落の人々は停電や断水が生じ、さらには余震が続き建物内にいることが困難な状況においても、避難場所の設営や炊き出しを問題なく円滑にやり遂げることができたのだと考えられるのである。

もちろん災害時の対応を円滑に行えた要因は、祭りを繰り返し行っていたことだけではないだろう。2005 年春に制作された鉢集落の人々による文集⁽⁴⁵⁾では、ある住民が中越地震後の対応が円滑であったことを称賛しつつ、その要因について「自主防災組織の設立と訓練が功を奏したもの」(吉田

(43) ツールド妻有のホームページ「ツールド妻有について」によれば、2006 年に「大地の芸術祭」において企画・発案されたサイクリングイベントである。2006 年以降毎年開催されているが、2020 年は新型コロナウイルスの影響により開催中止、2021 年はリモート形式での開催となっている。

(44) A 氏が中越地震翌年の 2005 年 8 月に、震災当時に残したメモ書きを元に作成した活動記録に基づく。

(45) 鉢集落では、集落の人々が執筆した原稿を綴じた「らくがき」という文集が、公民館活動の一貫で毎年制作されていた。文集の制作活動は 1963 年から 2007 年まで続けられ、計 44 号がつくられた。2005 年に発行されたのは 42 号である。

地区公民館真田分館編 2005:32)と述べている⁽⁴⁶⁾。またA氏や他の人が称賛する災害対応も、不備のない完璧なものではなかったと考えられる。例えば同じ文集では、災害時の対応に不十分な点があり今後改善する必要があるという意見も見られた⁽⁴⁷⁾。すなわち災害時の対応は、確かに円滑に行えたであろうが、不備のないものではなかったのである。だが、災害時の対応に不備があることと失敗することは同じではないだろう。共同作業における様々な試行錯誤は、災害時という経験のない状況であればなおさら起こりやすいはずである。それでも鉢集落の人々は、「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業を試行錯誤しながら自律的に行う経験に基づき、少なくとも大きな失敗なく、災害時の対応を遂行することができたと考えられるのである。

真生会の現役会員をはじめとする鉢集落の人々が祭りにおける共同作業を通じて共有する自律性は、「多数の人が満足できる場を設え運営する」ことを、メンバーや資材などの共通性が一定程度担保される限りにおいて、災害時のような経験のない状況でも適切に行える可能性をもつようなものである。

7 結論と今後の課題

(1) 本稿の議論のまとめ

本稿では新潟県十日町市鉢集落を事例として、そこで開催される様々な祭りにおける共同作業のあり方と、その共同作業を通じて成し上げられるようになることとの関係を考察した。

鉢集落の祭りにおける共同作業では、各作業の内容や役割分担はおおよそ定まっている。だが細部が曖昧で現場での判断に委ねられている部分が大きく、様々な試行錯誤を伴いつつ自律的に行われるという特徴がある。そのような特徴をもつ共同作業には、不要なやり直しや相談が生じ作業が非効率的なものになるという側面がある一方で、現場の人々の判断で時々の状況に対応し作業を問題なく行うことや、様々な工夫をして共同作業の質を高め祭りをよりよく開催することを可能にしているという側面もある。自律的な共同作業の遂行は、共同作業が様々な試行錯誤を伴うことも含む形で慣習化しているために可能になっている。「試行錯誤を伴う共同作業」の慣習化は、個々の祭りはもちろん、様々な祭りに通底する「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業一般に対しても生じており、それゆえ祭りに関わる人々が共同作業の経験を通じて共有する自律性も、この「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業に対するものでもあると考えられる。この自律性は、メンバーや用いる資材、行う事柄や進め方の共通性が限界と同時に可能性の条件となっており、それらの共通性が一定

(46) A氏によれば、鉢集落の自主防災組織は十日町市役所からの打診に即座に応答する形で、十日町市内で最も早く1999年に結成された。会員は全住民、代表は鉢区長が兼務する。自主防災組織としての活動は、2004年の中越地震以前では大規模な避難訓練を一度開催したことだけだったという。この避難訓練が中越地震発生後の対応に寄与したことは確かであろうが、それだけで円滑な共同作業を行えた訳ではないと考えられる。

(47) 避難所の場所が二転三転して困ったため、今後は「解かりやすくして頂きたい」(吉田地区公民館真田分館編 2005:28)という意見だった。

程度担保されるならば、災害時のような経験のない状況でも「多数の人が満足できる場を設え運営する」共同作業を行うことが可能になるのだと考えられる。以上が鉢集落の祭りにおける共同作業の特徴と、そのような特徴をもつ共同作業を通じて人々が地域で担えるようになっていく事柄である。

(2) 鉢集落の事例から得られる示唆

鉢集落の事例が示唆する、祭りを通じた地域社会の担い手づくりを構想・実践する際に留意すべきポイントとして、次の2点が挙げられる。

1) 試行錯誤する過程の重要性

鉢集落の人々が共同作業の際に行う試行錯誤は、繰り返し行うことで技能が向上し微細化するものではあっても、行われなくなるものではなかった。試行錯誤は共同作業を問題なく、さらにはよりよく行うために不可欠な過程であった。試行錯誤を伴いつつ自律的に行われる共同作業には、確かに非効率的な側面がある。それでも、各現場での一人ひとりの判断を尊重し、試行錯誤を繰り返し積極的に行っていくことは、徐々にではあっても確かに技能を向上させ、当該共同作業を時々の状況に応じて問題なく、ひいてはよりよく行える主体を形成していくことに寄与しうる。

2) 共通性をもつ意味

鉢集落の様々な祭りでは、メンバーや用いる資材、行う事柄や進め方に共通性が見られた。また雪まつりにはおよそ同一内容の共同作業を毎年繰り返す静態的な側面があり、これは他の祭りにも程度差はあれ当てはまる。これらの共通性のうち、とりわけメンバーや行う事柄の共通性に関しては、祭りの非日常性を弱めて魅力を低減させるという負の側面が、少なからずあると考えられる。それでも一定の共通性は、共同作業が試行錯誤を伴うことも含めて慣習化し、自律的に行えるようになる根拠となっている。そして祭りの場を問題なく運営しつつ、関わる全員で楽しむことを可能にしてもいい。この点で、メンバーや行う事柄などの共通性は、祭りの非日常性という魅力を必ずしも損なわず、鉢集落の場合にはむしろ非日常性を実現する条件となっている。鉢集落で約40年にわたり様々な祭りを継続して行っているのは、祭りに見られる共通性を積極的な条件として活かし、鉢集落の人々の多くにとって十分魅力的な祭りを実現できているからであろう。それゆえ祭りを通じた地域社会の担い手づくりに取り組む際には、メンバーや行う事柄などの共通性をもつ意味に留意し、その負の側面を自覚しつつも積極的な条件として活かすことが重要になるだろう。

(3) 今後の課題

鉢集落の祭りにおける共同作業において、現場の人々が試行錯誤を行うことは、慣習化した共同作業を遂行できる技能を向上させていくという意味でも、また時々の状況への対応や様々な工夫を行えるようにするという意味でも、本質的な重要性をもっている。だが福島真人(2010)が指摘するように⁽⁴⁸⁾、試行

(48) 試行錯誤のコストに関する議論は主に第4章(福島2010:139-169)で展開されている。

錯誤には失敗というコストがかかり、このコストをどう処理するかはそれ自体重要な問題である。福島は試行錯誤のコストについて、試行錯誤が頻発する初期の段階においては、コスト意識が大きくないため大目に見られると指摘している。この指摘は、試行錯誤が様々な形で行われる鉢集落の人々の共同作業に、少なからず当てはまるものだと考えられる。だがコストが大目に見られることと、コストがなくなることとは同じではない。共同作業に見られる試行錯誤には、積極的な価値をほとんどもたない「失敗」も少なからず生じている。そのような試行錯誤のコストに、真生会の人々をはじめとする鉢集落の人々はどのように対処しているのだろうか。また、試行錯誤に一定のコストがかかる理由の一つは、共同作業を通じてその遂行に必要な技能が向上する過程が、一定の水準で頭打ちになっていることだと考えられる。確かに鉢集落の人々は、現場の判断で様々な工夫をして祭りをよりよく実現しようとする積極的な態度を持ち合わせている。だが同時に、一定の水準で満足し多少の「失敗」が生じてもしようがないという消極的な態度も少なからず見られる。この消極的な態度にはどのような意味があるのであろうか。以上、試行錯誤のコストへの対処と技能向上に対する消極的な態度の意味については、今後別稿にて論じたい。

付 記

真生会の方々をはじめとする鉢集落のみなさん、絵本と木の実の美術館のみなさんは取材に快く協力してくださった。新潟大学大学院教育学研究科（当時）の伊藤春陽さんには2017年に真生会の取材へ同行する機会をいただいた。十日町市役所の担当課の方々は何合せに対して迅速丁寧にご回答くださった。また本研究は2017年度、2018年度および2019年度日本生活学会・生活学プロジェクトの研究助成を受けた。加えて本稿のもとになった研究の一部は上廣倫理財団令和元年度研究助成による。以上記して深謝する。

引用文献

- 芦田徹郎（2001）『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社
- 井上果子（2017）「山間地の伝統文化継承に見る新たな農村文化担い手の形—高千穂郷・椎葉山地域における神楽継承の事例研究—」『農村計画学会誌』36（論文特集号），375-382
- 井上果子（2019）「山間地における地域住民による伝統文化持続の条件—高千穂郷椎葉山地域における神楽祭りの運営実態分析から—」『農村計画学会誌』38(3)，369-378
- 卯田卓矢・阿部依子（2015）「過疎地域における祭礼の存続形態—佐久市望月地域の神祭りを事例として—」『地域研究年報』（37），33-59
- 上野千鶴子（1984）「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社，45-78
- 榎本美香・伝康晴（2020）「共同体「心体知」の学習—共同参加から学ぶ成員の心がけ—」『社会言語科学』23(1)，69-83
- 大野晃（2005）『山村環境社会学序説—現代山村の限界集落化と流域共同管理—』農山漁村文化協会
- 小田切徳美（2014）『農山村は消滅しない』岩波書店
- 小松和彦（1997）「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編『祭りとイベント』小学館，5-38

- 篠永信一郎・松村暢彦・片岡由香（2020）「祭礼活動の関与度と地域コミュニティに関する意識の関連性—愛媛県四国中央市伊予三島地区を対象として—」『都市計画論文集』55(3), 1047-1054
- 柴田彩子（2017）「「道づくり」という場が作るもの—集落における共同作業の意味—」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』13, 51-62
- 澁谷美紀（2000）「伝統行事の伝承と地域活性化—岩手県北上市SN集落の小正月行事の事例を中心に」『村落社会研究』6(2), 48-59
- 真生会（1992）『真跡（あしあと）』
- 菅原和孝・藤田隆則・細馬宏通（2006）「民俗芸能の継承における身体資源の再配分—西浦田楽からの試論—」『文化人類学』70(2), 182-205
- 塚佳織・山本信次（2010）「祭礼行事のソーシャル・キャピタルへの影響—岩手県陸前高田市気仙町けんか七夕を事例に—」『農村計画学会誌』28, 231-236
- ツールド妻有ホームページ「ツールド妻有について」<http://tdtsumari.info/about>（2021年12月27日アクセス）
- 十日町市ホームページ「新潟県中越地震の被害状況」<https://www.city.tokamachi.lg.jp/soshiki/somubu/bosaianzenka/4/gyomu/1450418291969.html>（2021年12月26日アクセス）
- 十日町市ホームページ「住民基本台帳人口」http://www.city.tokamachi.lg.jp/shisei_machidukuri/F100/F101/index.html（2022年1月10日アクセス）
- 十日町市ホームページ「過去の雪記録」http://www.city.tokamachi.lg.jp/kurashi_tetuduki/A044/A046/1545196578873.html（2021年12月27日アクセス）
- 根岸亮太・後藤春彦・田口太郎（2007）「祭事が地域運営に与える影響に関する研究—埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として—」『日本建築学会計画系論文集』72(622), 129-136
- 平井太郎（2019）「プロセス重視のコミュニティづくり—尊重の連鎖と関わり合い—」小田切徳美・平井太郎・岡司直也・筒井一伸『プロセス重視の地方創生—農山村からの展望—』筑波書房, 10-27
- 福島真人（2010）『学習の生態学—リスク・実験・高信頼性—』東京大学出版会
- 松岡昌則（2007）「村落と農村社会の変容」蓮見音彦編『講座社会学3 村落と地域』東京大学出版会, 63-91
- 山下祐介（2012）『限界集落の真実』筑摩書房
- 山田真茂留（2010）『非日常性の社会学』学文社
- 矢守克也（2011）『増補版〈生活防災〉のすすめ—東日本大震災と日本社会—』ナカニシヤ出版
- 吉田地区公民館真田分館編（2005）『らくがき No.42』
- レイヴ, J.・ウェンガー, E.（佐伯胖訳）（1993）『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書（Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press）
- 鷺田清一（1999）「酒の文化、酒場の文化」山崎正和監修・サントリー不易流行研究所編『酒の文明学』中央公論新社